

## 15-61 貸付可能な貨幣資本と再生産的資本

### 「第32章 貨幣資本と現実資本 III (結び)

このようにして資本に再転化すべき貨幣の量は、大量的な再生産過程の結果ではあるが、しかし、そのものとして見れば、貸付可能な貨幣資本としては、それ自身は再生産的資本の量ではない。

これまでに述べたことで最も重要なのは、収入のうち消費に向けられている部分の膨張(この場合労働者は問題にしない、というのは労働者の収入は可変資本に等しいからである)はさしあたりは貨幣資本の蓄積として現われるということである。つまり、貨幣資本の蓄積には、産業資本の現実の蓄積とは本質的に違った一つの契機がはいるのである。なぜならば、年間生産物のうちで消費に向けられる部分はけっして資本にはならないからである。……

貸付資本の蓄積とは、ただ単に、貨幣が貸付可能な貨幣資本として沈殿するということである。……

地代や労賃などからの貨幣資本の蓄積について言えば、ここではそれに立ち入ることはよけいである。ただ次のような契機だけは特にあげておきたい。すなわち、現実の節約や禁欲の仕事(貨幣蓄蔵者による)は、それが蓄積の諸要素を供給するかぎりでは、資本主義的生産の進展に伴う分業によって、このような諸要素の最小限を受け取っていながらしかも銀行の破産のさいの労働者のように非常にしばしば自分の貯蓄さえもなくしてしまうような人々に任せておかれるということである。一方では、産業資本家の資本は彼自身によって「貯蓄」されるのではなく、彼は自分の資本の大きさに比例して他人の貯蓄を自由に使うのである。他方では、貨幣資本家は他人の貯蓄を自分の資本にし、また、再生産する資本家たちが互いに与え合う信用や公衆が彼らに与える信用を自分個人の致富の源泉にするのである。資本主義体制の最後の幻想、すなわち、資本が自分自身の労働や貯蓄の生みの子でもあるかのように思う幻想も、これで砕かれてしまう。単に利潤が他人の労働の取得であるだけでなく、この他人の労働を動かし搾取するための資本も他人の所有物から成っているのであって、この他人の所有物を貨幣資本家が産業資本家に用だて、そのかわりに今度は前者が後者を搾取するのである。」(大月版『資本論』⑤ P646F1-650F6)